

このマーク(複十字)は、
世界共通の結核予防運動の
旗印です。

No.
410
2023.5

結核・肺疾患予防のための 複十字

アジアと
世界の結核を
なくさなければ
日本の結核は
なくならない



公益財団法人結核予防会

本誌は複十字シール募金の
収益により作られています
<https://www.jatahq.org>



総裁秋篠宮皇嗣妃殿下

ご動静

第74回結核予防全国大会より

と き 令和5年2月14日、15日

ところ ホテル日航熊本（熊本県熊本市）

秋篠宮皇嗣妃殿下は、14日に研鑽集会のご聴講等をなされ、15日の大会式典にご臨席になりました。式典ではお言葉を述べられ、秩父宮妃記念結核予防功労賞受賞者に表彰状を授与されました。



本日、「第七十四回結核予防全国大会」が熊本県において開催され、全国から参加された皆さまにお会いできましたことを、大変うれしく思います。そして、この大会を開催するために準備をしてこられた関係者の皆さまに、感謝いたします。

まず、「第二十六回秩父宮妃記念結核予防功労賞」の表彰を受けられる皆さまに、お祝いを申し上げます。また、この度の受賞者をはじめ、結核対策に貢献してこられた方々に、深く敬意を表します。

日本の結核は、二〇二二年の統計では、罹患率が人口十万人対九人となり、低まん延化が初めて達成されました。しかし、この年も、約二万二千五百人が新たに結核を発症し、約千八百人が命を落としました。新規登録結核患者の四割以上は、八十歳以上の高齢者です。また、若年層の結核患者には外国出生者が多く、特に二十代では、新規登録結核患者の七割にのびります。このようなことから、これからも、結核患者の早期発見や治療に力を入れるとともに、罹患率が高い国に対する協力をおこなうことが求められております。

昨日の研鑽集会では、災害時や感染症流行時の医療について基調講演があり、それに続くシンポジウムでは、地域の支援センター、医療機関、保健所、結核予防婦人会から、それぞれの災害時の対応や結核対策の取り組みについて発表がありました。災害後の医療や生活再建に加え、感染症の世界的な流行という困難の中で、地域の人々に寄り添いながら関係者が力を尽くされていることを、とても心強く思います。

先日は、トルコ南東部を震源とする地震が発生し、トルコとシリアに甚大な被害を及ぼしました。多数の人が命を失い、被災された人々が厳しい状況におかれていることに心を痛めております。極めて寒い天候の中ですごす人々の健康が守られることを願わずにはいられません。そして、災害時における医療・保健はもとより感染症対策が重要であることに、改めて思いをいたしております。

結核予防に関わる皆さまが、ご自身の健康に留意されながら、今後さらに活躍されることを願い、式典に寄せる言葉といたします。

第98回日本結核・非結核性抗酸菌症学会総会・ 学術講演会の開催にあたって

結核研究所

所長 加藤 誠也



日本結核病学会は1923年に創立され、第1回学会総会は北里柴三郎博士を会長に同年4月に東京で開催されました。第98回日本結核・非結核性抗酸菌症学会総会・学術講演会は学会創立100周年記念大会として、2023年6月10日（土）、11日（日）に京王プラザホテル（東京・新宿）で開催されます。この学会長を拝命したことは、結核研究所にとって名誉なことであり、関係の皆様にご心より御礼申し上げます。

日本の戦前・戦後の結核のまん延状況は極めて厳しい状態でありましたが、官民挙げての対策によって、2021年に低まん延国になりました。本学会では、結核研究・対策に尽力された先人の功績を振り返り、次の目標である結核の根絶への道を切り開くために、若い力も結集して革新的な技術の開発や対策・臨床の課題について議論したいと思います。このような思いを込めて、本学会のテーマを「歴史を振り返り、結核の根絶に向けて～抗酸菌を巡る研究は面白い～」としました。

プログラムには、日本の結核の研究・対策の歴史、欧米のみならずアジアから最新の情報、革新的技術につながる基礎的研究、今後の臨床・対策上の課題となる高齢者・外国出生者・新型コロナウイルス感染症と結核、また、近年進展が著しい非結核性抗酸菌症などを盛り込みました。さらに、基礎的な事項に関するセミナー・シンポジウムも用意しました。

また、市民公開講座「日本の結核予防の礎を創った人々」を開催して、北里柴三郎博士をはじめ5人の先人の功績を顧みます。オンラインでも配信しますので、ぜひ、ご参加ください。（申し込み方法等の詳細は本誌21ページにあります）

本学会が対策・研究の歴史を踏まえた上に、低まん延になった日本の結核対策・研究のさらなる発展に寄与するものになれば幸いと考えております。

Contents

■メッセージ

第98回日本結核・非結核性抗酸菌症学会総会・学術講演会の開催にあたって 加藤誠也…… 1

■「第27回世界結核デー記念国際結核セミナー」に参加して

森近省吾…… 2

■令和4年度結核対策推進会議に参加して

澤島暁子…… 3

■結核対策活動紹介

外来業務の負担軽減への取り組み 採痰指導動画がもたらす効果の検証 上柳加代美…… 4

■ずいひつ

ファンレイジングの可能性～共感が生み出す善意の資金循環～ 久保匠…… 7

■教育の頁

禁煙は健康長寿の大前提—たばこことさよならしましょう 中村正和…… 8

■世界の結核研究の動向(34)

U.S.-Japan Cooperative Medical Sciences Program 2023 International Conference on Emerging Infectious Diseases in the Pacific Rimに参加して 瀬戸真太郎……10

■世界の結核事情(37)

ザンビア事務所活動報告(後編) 後藤真喜子・松岡裕子・天野さとみ……12

■TBアーカイブだより(2023年5月)

鎌倉と結核—鎌倉海浜院と長興専斎 石川信克……14

■支部長だより

支部長就任のご挨拶 笹井敬子……17
支部長就任のご挨拶 加藤智栄……17

■日本対がん協会・結核予防会共催

同じ目標を目指す全国の仲間との濃密な三日間
「令和4年度診療放射線技師研修会」に参加して

宮本修治……18

■ストップ結核パートナーシップ日本だよりNo.42

2023年「世界結核デー」に関係機関が寄せたメッセージ 宮本彩子……22

▽予防会だより・シールだより

○結核研究所が開催する国内研修・講習会のご案内 ……19

○令和5年(第38回)結核研究奨励賞
受賞おめでとうございます! ……20

○第27回結核予防関係婦人団体中央講習会
(3年ぶりの対面による開催) ……20

○第98回日本結核・非結核性抗酸菌症学会
市民公開講座お知らせ ……21

○令和4年秋の叙勲受章 ……24

○第12回本部・総合健診推進センター業績発表会を開催 ……24

○結核予防会支部だより
広島県支部に多目的循環器検診車(宝くじ号)導入

○世界の結核事情 ザンビア事務所活動紹介

○令和5年度複十字シール

〔表紙〕撮影・コメント：関健太郎氏

〔コメント〕

「タヤけお空の外に出たい。」
窓から差し込む夕日が眩しくなったころ、シールぼうやが言いました。
外には、オレンジ色の空が静かに広がっていました。
「この空を見せたい。今は働いている、おねえさんたちに見せたい。
だから写真を撮って。」とシールぼうやが言いました。
結核のない明日を見据え、その日が来るのを決してあきらめない、
固い決意がシールぼうやに見えました。

「第27回世界結核デー記念国際結核セミナー」に参加して

沖縄県保健医療部南部保健所

所長 森近 省吾

令和5年3月2日にWebにて開催された「第27回世界結核デー記念国際結核セミナー」に参加した。

本年度のテーマは「入国前結核健診開始後の国内における外国人結核患者対応の課題と展望」だった。

特別公演として、米国CDC国際移住検疫局のDrew L. Posey先生から「US Pre-entry TB Screening Program and Post-Entry Follow-up（米国入国前スクリーニングプログラムおよび入国後フォローアップ）」の題目で、米国の対策をご紹介いただいた。

入国前スクリーニングを実施する国際パネル医師協会所属のパネル医師に対する研修と教育、スクリーニング時の胸部X線所見陽性者に対する喀痰培養検査、培養陽性者に対する米国ガイドラインに沿った直接監視下（DOTS）での治療、海外での健康診断の結果を電子的に入力しデータベース化による受入先地域の保健局との情報共有、海外で喀痰検査を提出した者・IGRA検査陽性者・海外での結核患者との接触者などのフォローアップ、特に海外で胸部X線等にて結核が疑われたが培養が陰性であった例のフォローの重要性などをわかりやすく解説して頂いた。

後半では、「JPETS開始後の国内における外国出生結核患者の対応の課題と展望」のテーマでワークショップが行われた。（JPETS: Japan Pre-Entry Tuberculosis Screening*）

国際移住機関（IOM）の高橋香先生から、入国前スクリーニングの目的・利点、IOMの取組（69か所のIOM健診センターの運営・遠隔レントゲン画像読影・検査の不安定な国53か所での臨床検査室の運営・データベース化による情報の共有など）、JPETS活用の可能性・今後の課題、JIMS（JPETS Information Management System）の重要性が紹介された。

大阪市保健所の津田侑子先生から、大阪市でも20代を中心に外国出生の結核患者が増加し、日本語学校

での定期健康診断を行い早期発見に繋げる取組が紹介された。JPETSの実施により日本語学校生の結核の減少が期待されるが、導入後も入国後の定期健診および有症状時の早期受診は引き続き重要なこと、40歳以上の就労者、無職の人への定期健診の必要性が課題として示された。

結核研究所の座間智子先生から、外国出生の結核患者の現状が紹介された。また、外国出生結核患者は言語の問題や経済的な課題や、差別や偏見・在留資格の課題を抱えており、医療機関・保健所・患者が所属する関係機関など多職種・他機関連携、中立的立場の医療通訳の介入などによる患者中心の支援の実現の重要性が示された。

国立国際医療研究センターの橋本理生先生から、入国後半年以内に発症するなど「母国でX線検査をしていたら、治療後に日本に来られたのに」という症例が少なくなく、これらはJPETSの実施で入国前に発見が可能であるが、入国1～2年後に発症する例はJPETSでの診断は困難で、JPETSの限界の理解および入国後の定期健診の継続の重要性が示された。

JPETSは早ければ今年度にも実施されると聞いている。沖縄県においても、20代の日本語学生および技能実習生を中心とした外国出生の結核患者が増加しており、JPETSの実施に対する期待は大きいものがある。しかし、限界があることも理解し、本日のセミナーを参考に、実施後の課題を整理し対応策を検討していきたいと考える。

コロナ禍の中、Web形式でセミナーを開催し、継続して新しい話題を提供していただいている加藤誠也所長をはじめ結核研究所の皆様のご尽力に感謝の意を表し、報告とさせていただきます。🍷

*（編集部注）入国前結核スクリーニング

令和4年度結核対策推進会議に参加して

水戸市保健所

保健予防課 澤島 暁子

水戸市は、令和2年4月1日に県内初の中核市となり、保健所を設置いたしました。保健所設置と同日に、市内で初めて新型コロナウイルス感染症患者が確認されて以降、この3年間は、新型コロナウイルス感染症との戦いの日々となりました。

このような中、思いどおりには結核対策を進めてこれられませんでした。毎年、この「結核対策推進会議」には参加させていただき、学ばせていただいた内容を本市の結核対策に役立ててまいりました。

今年度は、「結核低まん延時代の結核対策 新たな展開」を会議テーマとし、「結核医療の質の強化」、「基礎疾患がある結核患者の療養支援」、「今後の結核対策の方向性」の3つの講演が開催されました。

それぞれの講演を通して痛感したことは、やはり職員の専門的な知識や経験の確保・向上の難しさです。保健所は地域における結核対策の中核的な拠点ですが、本市保健所は開設してからまだ3年しか経過しておらず、しかもこの間、配置されている全保健師が新型コロナウイルス感染症対応に明け暮れていたため、深く結核対策に関わる事ができておりません。

このような中、今回の講演でお話いただいた「奈良県結核対策医師相談・地域連携強化事業」については、大変興味を持ちました。当該事業は、地域と連携し、結核診療体制を強化することを目的に開始された事業で、結核の専門機関の医師が地域の結核対策に関わる職員からの相談に応じたり、研修会を開催して最新情報を提供したりしていただけるとのことでした。もし身近に、専門医師による相談窓口があればとても心強いと感じました。このような事業が全国的に広がっていくことを、強く望んでいるところです。

また、実際の事例に基づいた説明を数多くいただけたことも、大変勉強になりました。私たち保健所職員が関係機関と連携し、行政と現場が協力しながら、地

域の結核予防対策を担っていくことがいかに重要であるかを再認識させていただきました。結核健診の受診勧奨や結核についての正しい知識の普及啓発等に積極的に取り組んでいきたいと改めて感じました。

さらに、外国出生者の結核患者支援は、言語の障害が大きな課題でしたが、さまざまなツールを紹介していただいたので、早速支援の際に利用していきたいと思います。

講演後に行われたワークショップにおいては、結核に罹患した技能実習生の孤独と不安、お金の問題など、厳しい現状が伺えました。本市で結核の治療をした技能実習生も、症状が落ち着くと、「お金を稼がないと」「一日も早く仕事に復帰したい」と訴えてくるがありました。この時には、幸いにも、勤務先の協力が得られ、会社の通訳者を派遣してくれたり、上司がDOTSをしてくれたりと、疾患を理解して支援いただけましたが、今後さらに外国出生者の結核患者が増えると、さまざまな支援困難ケースが出てくるだろうと想定しているところです。

まだまだ私自身も経験不足で、日々奮闘中ではありますが、今回学ばせていただいた研修内容を生かし、結核対策における知識をさらに広げ、地域の結核対策に貢献できるよう、全力で取り組んでいきたいと思います。

今後とも、このような素晴らしい学びの場を続けていただけるよう切に願って、結びとさせていただきます。🍵



一般財団法人大阪府結核予防会 大阪複十字病院
看護部看護科長 上柳 加代美

背景

喀痰検査は、結核をはじめとする呼吸器疾患の鑑別や肺がんの発見などに重要である。当院内科は呼吸器疾患を専門に扱っており、外来患者の約4割に自宅採取や院内至急の喀痰検査がオーダーされる。喀出困難な患者に対しては、検査技師による採痰指導、ラングフルート使用、高張生理食塩水吸入や経気管吸引を行うが、これらに対し看護師は少なからずストレスを感じていた。また喀痰検査の月平均依頼数は2015年の261件が2019年には538件と2倍に、吸引数も15件から49件と大きく増加しており、外来業務中に採痰に関わる時間を捻出することは困難な状況であった。更にCOVID-19の感染拡大以降は、感染防止の観点から喀痰吸引は可能な限り行わない状況に陥った。

目的

患者に採痰指導用動画を視聴して貰うことで、良質な喀痰採取効果と外来業務の負担軽減に繋がらないかと考え検証することにした。

方法

期間は、2019年8月から2020年4月。対象は、喀出困難な患者と初診患者82名、外来スタッフ（看護師、検査技師）21名とした。既存の動画「良い喀痰のとり方」¹⁾を20分から8分に短く編集し、採痰室での待ち時間やQRコードを利用して自宅で視聴して貰った。動画は3か国語対応で、英語視聴4名・中国語1名を含む。その後、患者には喀痰の性状・吸引割合の調査とインタビュー、外来スタッフにはアンケート調査を行った。

結果

対象患者は10代から80代の82名で平均年齢は58.9才であった。視聴した患者のうち58名が自己喀出し24名の患者は吸引に至った。しかしその中の9名は2回目以降自力で喀出できた。痰の性状調査として、喀痰の肉眼的評価法であるM&J分類法の結果を比較した。今回の研究前後でP1とP2の合計はともに30%で、

P3,M1,M2にも差は殆ど無かった。至急依頼の喀痰抗酸菌塗抹の陽性率の推移比較は、直近は若干低い結果であった。患者インタビューでは、「絶対に出ないと思ったけど出るんですね」「水分と呼吸が大事だと知った」「動画を思い出しながら痰を出した」「吸引がいつもより楽に感じた」「中国語があつて助かった」など効果的に受けとめた意見があつた反面、「胸は動画みたいブーブー言っていないから見ても意味がなかった」という患者や「見てもよくわからなかった」と答えた高齢者もいた。外来スタッフへのアンケート(表1)では、『吸引などの患者の苦痛軽減を実感しているか』の問いに17名80%がそう思う、まあそう思うと答え、『統一した採痰指導が出来るようになったか』『深呼吸や体位ドレナージの必要性がわかり指導に活かされたか』には85%続いて『M&J分類法を理解し痰の採り直しを最小限に食い止めた』『吸入や吸引などの業務の負担軽減につながった』には76%がそう思う、まあそう思うと答えていた。隔離室での診察待ちの間に動画を見てもらったことに対して『待ち時間の活用』『スムーズな採痰に繋がり結核の早期診断によい』と評価する意見が多く、自由記載では『良質な痰の重要性を再認識した』『高齢者への対応などが課題』の意見があつた。

考察

良質な喀痰採取に採痰指導が有効であることは過去に証明されている²⁾が、今回のM&J分類調査の結果から、採痰指導を動画指導に置き換えても喀痰の性状低下を来たことなく検査に繋がれたと考察する。また、初回に吸引した患者24名のうち9名が2回目以降自力喀出していることから、自宅での採痰の際に動画の内容を思い出して参考にしたり、QRコードを利用して自宅でも動画を視聴した効果の表れだと考え。患者インタビューの「絶対に出ないと思ったけど出た」「動画を思い出しながら痰を採った」との意見からは、動画を繰り返し視聴することで喀痰検査の意義や必要

性を納得し、水分補給や深呼吸が良質な痰の喀出に効果的であることなど、患者自身がより喀痰排出の理解を深めた成果であると推察する。また吸引に至った患者も、動画の内容に準じて喉を潤わせ深呼吸で痰を上気道付近まで押し上げていたと推測され、このことが「吸引がいつもより楽に感じた」との回答につながったのではないかと考える。

良質な痰の採取には、20分程度時間をかけてゆっくり採痰指導することが望ましい²⁾とされているが、多忙な外来業務の中、指導に時間を費やすことができていなかった。採痰指導を行ったことのないスタッフもいることから説明には個人差が生じていたが、動画で採痰方法を学んだことで指導の統一と時間の短縮が図れ、患者・スタッフ共に有効であった。スタッフアンケート結果の、指導時間の減少と吸入・吸引が減ったとの実感は、業務負担の軽減、更に吸引などで患者に苦痛を与える当事者としての精神的負担の緩和が影響したともいえる。また、スタッフ自身がM&J分類法を理解することで痰の採り直しを最小限に留めたこと、待ち時間を利用したことで、結核の早期診断に貢献できたと考える。しかし高齢者などでは見てもわからなかったと答えた患者もあり、患者に応じて直接採痰指

導や説明用紙との併用などの工夫が必要である。

今回、過去の研究条件を基に塗抹陽性率を調査したところ有効な結果が得られなかったが、多変量解析に必要なデータを取得し陽性率推移の研究も興味深く今後の課題としたい。

結語

採痰指導を動画視聴に置き換えても喀痰の性状に変化はなかった。動画視聴は外来スタッフの業務負担軽減に効果をもたらし、喀痰検査の重要性を理解することが良質な採痰には重要であると認識できた。今後は多様な患者層にも対応できるようパンフレット併用などの工夫検討が課題である。更にCOVID-19の如く未知なる病原体と対峙する際のリスク回避の観点からも自己喀出の増加に尽力したい。

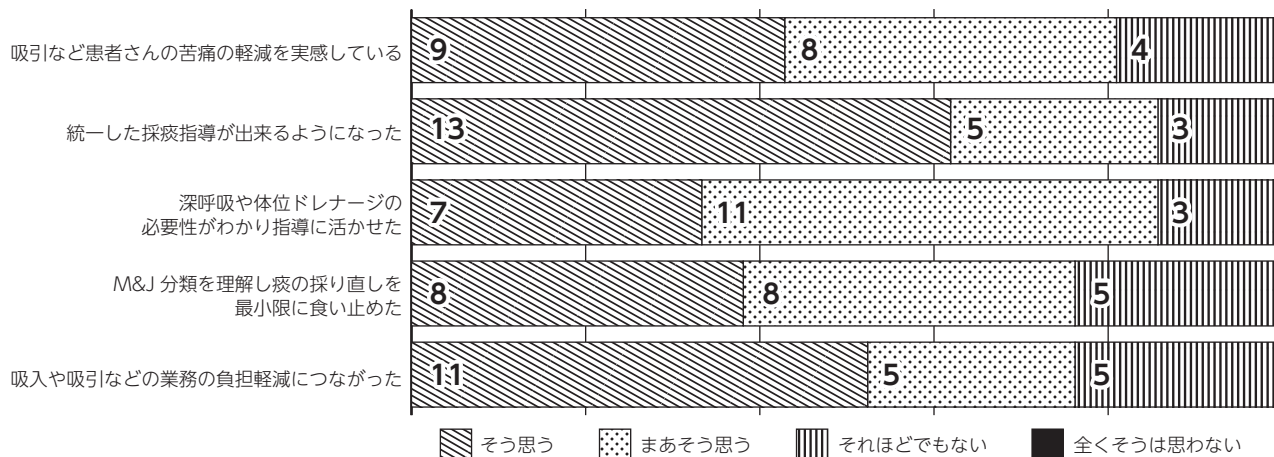
謝辞

この研究に協力していただいた患者様、外来スタッフ、検査科伏脇猛司先生に感謝申し上げます。🐾

《引用・参考文献》:

- 1) 日本ベクトン・ディッキンソン株式会社
 - 2) 廣岡徹久, 樋口武史, 田中奈加子, 小倉剛. 抗酸菌検査における採痰指導の有用性. 結核 2004;79:33-37
- 奈良信雄 (2009) 看護師のための検査値・数値辞典 秀和システム P244
結核の常識/新・結核用語辞典 結核予防会結核研究所 <https://jata.or.jp/about.php>
咳嗽・喀痰の診療ガイドライン2019 日本呼吸器学会 169p.

表 1. スタッフアンケート 動画視聴の効果



動画の一場面

医療職員は
N95 マスク

患者さんは
不織布マスク



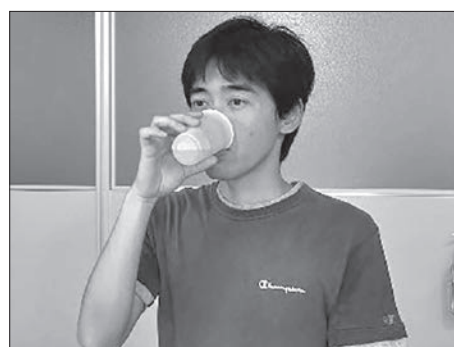
①マスクを装着



②喀痰検査の意義を説明



③うがいで口腔内の雑菌を除く



④適量の水分を飲む



⑤軽く体操（肩上げ・前後・左右・背伸び）をして身体の緊張をほぐす



⑥レントゲンで影ある部分に手を当て深呼吸を繰り返す



⑦痰の貯まった側を上になり、30 分間ゆっくりと深呼吸を繰り返す



⑧痰が出そうになれば、体を起こし深呼吸し、**口からぱつ**と**一気に**呼出



ずいひつ ファンドレイジングの可能性 ～共感が生み出す善意の資金循環～



日本ファンドレイジング協会

法人連携推進パートナー

久保 匠

昨今、「社会貢献」という言葉を頻繁に耳にするようになった。SDGsの普及に伴い、企業はサステナビリティへの貢献に取り組み、行政は「誰ひとり取り残さないまちづくり」を掲げて政策を打ち出す。次世代を担う若者は義務教育課程から社会貢献を学び、社会との関わり方を探求する。このように、立場や世代を問わず、社会貢献をごく「当たり前」のこととして行うことが増えてきたように感じている。

そんな中、社会に貢献することを“仕事”にする人たちがいる。NPO法人や公益法人のような、いわゆる「非営利セクター」である。彼らは社会課題解決に向けたビジョンを掲げ、活動を通じて社会を変えていくプロフェSSIONALだ。私は大学生時代に非営利セクターの活動に触れて、人生を懸けて社会を変えるために邁進する姿に強烈な憧れを抱いた。いつか自分も社会を変えるプロフェSSIONALとして福祉の現場で活躍することを信じて止まなかった。気が付けば就職活動を放棄し、学生時代から関わっていた福祉系の活動を行うNPO法人に就職する道を選択していた。

社会貢献を念願の“仕事”にした私がぶつかった高い壁が「お金」である。社会課題を解決するための仕事は、いわゆる「受益者負担の原則」が成立しないケースが極めて多い。例えば子どもの貧困支援活動を行うために「子ども」から対価＝お金を受け取ることは難しいだろう。環境保全活動を行うために「環境そのもの」からお金を受け取ることはできないだろう。しかし、活動を継続・発展させるにはお金が必要である。私が携わっていた分野も同様であり、目の前に困っている人がいるにもかかわらず、「お金が無い」という理由で諦めなければならないという場面に遭遇することもあった。この状況を打破すべく、もがきつづけていた時に出会ったのが「ファンドレイジング」だった。

ファンドレイジングとは、NPO等が活動のための資金を個人・法人・政府等から集める行為の総称である。

資金調達の方法は、寄付、会費、助成金、委託金、事業収入、融資のように多岐に渡り、それらを戦略的に獲得して社会を変える専門人材が「ファンドレイザー」である。日本の先駆者であるファンドレイザーたちは、「ファンドレイジング＝単なる資金調達」ではなく、「ファンドレイジングの本質は共感を集め共に社会を変える仲間をつくること」であると言う。

私が新米ファンドレイザーの頃、ある環境保護活動を行うNPO法人のファンドレイジングをお手伝いすることになった。子ども向けの環境教育活動と持続可能な地域づくりを推進している団体で、決して潤沢な予算があるとは言えない団体だった。ある日、この団体が新しく“寄付付きグッズ”を開発し販売することになった。大々的に商品をPRしたいところだが、広告宣伝に割ける予算などあるはずもなく、不安を拭い去れないまま販売を開始した。ところがわずかの1週間で250個の商品が完売したのだ。購入者リストを分析したところ、そのほとんどが、その団体にこれまで寄付をした人や会員だったのだ。購入者に話を聞いてみたところ、「団体の役に立てるのなら、喜んで購入したいと思った」と回答していた。加えて、購入者のうちの多くは、自らが購入するだけでなく、自分の知人や友人にも宣伝してくれていたのだ。団体はここで得た資金を新しい社会を変える取り組みに再投資することで、どんどんと成長していったのだ。

この出来事により、私はファンドレイジングが生み出す“共感の連鎖”という可能性の虜になった。あの日から今日まで数多くの社会起業家と出会い、対話を重ねてきたが、社会を変える取り組みの多くは、“共感”から始まっていると実感している。

私はファンドレイジングの可能性を一人でも多くの人に伝えることで、社会を変える一助を担うと心に決めた。🐾

禁煙は健康長寿の大前提—たばことさよならしましょう

公益社団法人地域医療振興協会
ヘルスプロモーション研究センター
センター長 中村 正和

1. たばこを吸う人が減っても続く甚大な健康被害

わが国では喫煙する人が減ってきて、男女合わせた喫煙率が2割を切りました。ただし喫煙の影響は20～30年遅れて顕在化するため、健康被害は今なお続いています。2019年の1年間に喫煙が原因で命を落とした人は約19万人と推定されており、毎日500人を超える人が亡くなっている勘定になります。この10年余り喫煙率が下げ止まっていることや人口の高齢化が進んだ影響で、人口減少にも関わらず、喫煙で命を落とした人の数は増加しています。2007年では13万人でしたので、12年間に約6万人増加したことになります。

ところで、たばこを吸っている方の中には、「太く短く生きたい」から気にならないといった反論があるかもしれません。しかし、喫煙すると、認知症や脳卒中、骨折などのリスクが高まり、要介護になりやすくなります。わが国の研究によると、喫煙を続けると認知症のリスクは吸わない人に比べて2～3倍高くなると報告されています。残念ながら、太く短くという人生設計通りに運ぶ保証はないのです。さらに困ったことがあります。認知症になってもたばこを吸っていると認知障害と依存症のために禁煙が難しくなります。たばこの消し忘れによる火事の問題も深刻化します。家族や近隣に迷惑を掛けないためにも、また、人生の最終段階を健やかに過ごすためにも、たばこを卒業することは人生100年時代において優先順位が高いのです。

受動喫煙によっても年間1.5万人の命が奪われています。受動喫煙の本質は他者危害であり、有害物質の規制の観点から社会としての対策が必要です。わが国でもようやく2020年に罰則付きの改正健康増進法が全面施行され、規制が強化されました。たばこを吸わないことに加えて、受動喫煙を防ぐことは、健康長寿の大前提といえます。

2. 新感染症時代における喫煙問題

新型コロナウイルス感染症（以下、新型コロナ）の流行が約3年以上続いています。喫煙は、免疫機能の低下や基礎疾患の重症化を介して、新型コロナの重症

化や死亡のリスクを高めることがわかっています。最近の研究では、喫煙していると新型コロナのワクチンの抗体価が上昇しにくく、ワクチンの効果が弱まることが報告されています。

喫煙は新型コロナのほかにも、結核、肺炎球菌、インフルエンザ、胃潰瘍や胃がんの原因となるピロリ菌、子宮頸がんの原因となるヒトパピローマウイルスなどの感染症のリスクを高めることが明らかになっています。21世紀は感染症の時代とも言われています。新型コロナをはじめ、今後流行するかもしれない未知の感染症で命を落とさないためにも、禁煙を先送りしないで抵抗力をつけておくことが大切と言えます。受動喫煙でも感染症のリスクが高まりますので注意が必要です。

3. たばこの正体とは

「わかっているけどやめられない」のがたばこです。やめられない主な理由は、ニコチンの作用で脳がたばこ（正確にはニコチン）を欲する状態が作り出されることです。この状態をニコチン依存といいます。ニコチンが依存症をつくり出す仕組みもわかっています。ニコチンは、脳に作用して快楽物質であるドーパミンを過剰に放出させ、日常生活では体験できない強い快感や多幸感をもたらします。この強い快感を求めてニコチンを取り続けると、依存の深みにはまってしまうのです。自分で「吸っている」つもりが、実はニコチンに脳をハイジャックされ「吸わされている」のです。しかもニコチン依存に陥ると、合理的な判断よりも非合理的な判断を直感的に行いやすいこともわかっています。現在の快楽を重視して現状維持を好むといった思考パターンに陥りやすいことも、たばこをやめにくくする理由になっています。

ニコチン依存が続くと、人工的にドーパミンを出し続けたツケが回って、たばこの本数を増やしても、以前と同じ快感が得られにくくなり、さらに日常生活での小さな幸せも感じにくくなります。さらに困るのは、依存症が続く限り、ニコチンの離脱症状（いわゆる禁

断症状)から逃れられないということです。ニコチンは肝臓で素早く分解され、わずか30分で血液中の濃度が半分に減少します。そのため一日中、ニコチン切れによるストレスを抱え続けることになります。ニコチンを補給すると禁断症状が収まるので、喫煙がストレス解消になると勘違いしてしまいますが、実は本当のストレス解消にはなっていないのです。

このように、「快」から始まったニコチン依存は、いつの間にか、「不快」から逃れるためにたばこを吸うという状態に切り替わってしまいます。ニコチンの場合、派手な禁断症状が出ないので実感しにくいですが、まさに薬物依存の生活に陥ってしまうのです。

4. たばことさよならをするために

禁煙は、登山に例えることができます。「禁煙登山」では、ニコチン依存の度合いにより、山の高さが変わります。今から30年くらい前までは、富士山のような高い山に登る場合も、自分でふもとから一步一步登る「禁煙登山」しかありませんでした。そのため、禁煙を真剣に考えてから7～10年の年月をかけ、平均3,4回の禁煙のチャレンジを経て、生涯禁煙者になるのが普通でした。

しかし、ニコチンガムや貼り薬のニコチンパッチ、飲み薬のバレニクリンといった禁煙補助剤が登場してから、「禁煙登山」は様変わりしました。これらの薬剤はロープウエーの役割を果たし、高い山への登山でも、従来に比べて楽に、年月をかけずに禁煙を達成できるようになったのです。

禁煙外来では、バレニクリンやニコチンパッチを公的医療保険で処方してもらえるほか、医療スタッフが励ましてくれたり、無理なく禁煙する方法をアドバイスしてくれたりします。これらの薬を使って禁煙すると、6カ月間以上続く禁煙成功率は自力で禁煙した場合に比べて4～6倍も高くなります。

バレニクリンは製造上の問題で現在出荷が停止されていますが、ニコチンパッチが使えるので問題はありません。禁煙外来を行っている医療機関は、日本循環器学会や日本禁煙学会のホームページなどで検索できます。

最近加熱式たばこが流行しています。加熱式たばこは紙巻たばこに比べて有害成分の摂取は減らせるものの、病気のリスクを減らせるという保証はありません。その理由は、受動喫煙でも周囲の人が病気になるよう

に、たばこの有害物質にはここまで安全だという安全域がなく、少量の有害物質でも一定期間取り込むと病気のリスクが上がるからです。しかもニコチンは同程度含まれているため、ニコチンに支配される生活は続きます。たばこの種類に関わらず禁煙することが大切です。

禁煙外来で禁煙した人が異口同音に言うのは、「こんなに楽に禁煙できるのであれば、もっと早く先生の所に来ればよかった」です。わが国の実績では、禁煙外来3カ月の治療終了時点で7～8割の人が禁煙に成功しています。

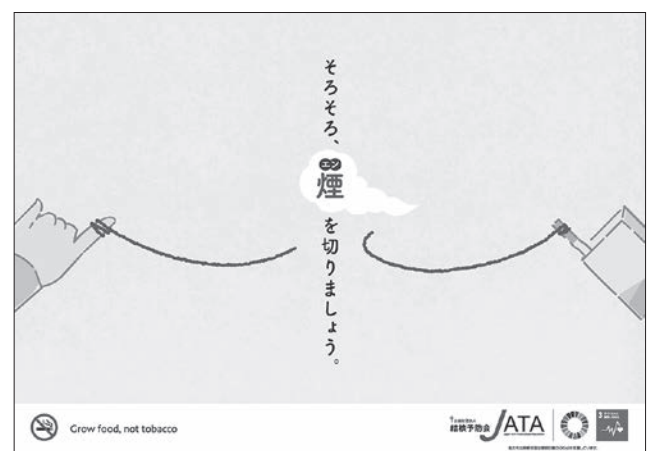
まずは体験といった軽い気持ちで、禁煙外来を利用することをお勧めします。きっと禁煙への扉が開かれます。

5. おわりに

本稿をお読みになっている方の多くは、たばこを吸っていない方だと思います。ここで得た情報をぜひ周囲の方に伝えて、命を守る活動につなげてください。(公社)地域医療振興協会のヘルスプロモーション研究センターでは、コロナ禍の禁煙の重要性や加熱式たばこの健康影響などをわかりやすく解説したポスターや動画を作成して、ホームページで公開しています。ぜひご覧ください。

参考文献:

- 1) 地域医療振興協会ヘルスプロモーション研究センターホームページ
(<https://healthprom.jadecom.or.jp/>)



結核予防会作成の禁煙ポスター（令和5年度）
ポスター標語「そろそろ煙（エン）を切りましょう。」

U.S.-Japan Cooperative Medical Sciences Program 2023 International Conference on Emerging Infectious Diseases in the Pacific Rimに参加して

結核研究所生体防御部

免疫科長 瀬戸 真太郎

初めに

この度、2023年3月7日から10日にかけてフィリピン・マニラで行われたU.S.-Japan Cooperative Medical Sciences Program (日米医学協力計画) 2023 International Conference on Emerging Infectious Diseases in the Pacific Rim (EID会議) にオンライン参加しましたので、報告します。

日米医学協力計画は、日米の協力によってアジアでまん延する疾病に対処することを目的に、1965年に発足したプログラムです。両国の研究者が共同で研究を進め、新しい感染症の予防法や治療法の開発、感染症対策に必要な技術の開発などに取り組んでいます。本会議では、日米の様々な感染症に関わる研究者だけでなく、ホスト国のフィリピンをはじめアジアから多くの研究者が参加、発表して活発な討論が行われました。

全体会議にて

1日目の会議ではShimao-Takeda Lectureshipとして、結核研究所名誉所長の森亨先生による島尾忠男先生の追悼講演がありました。2021年3月にご逝去された島尾先生の結核研究における功績、貢献、熱意については本誌400号にて紹介されています。島尾先生は、終戦直後から疫学的分析を手掛け、日本における結核疫学の先駆者となりました。以来、結核研究所を舞台に結核を中心とした呼吸器疾患の診療、教育、疫学、対策、現場での活動と幅広く活動を行い結核病学会、公衆衛生学会、その他の学会においても、結核研究の強力な推進者、中心的存在として活躍してこられました。講演では、島尾先生が常に結核医療、対策の向上を目指し研究を行い、実践されていたことが紹介され、深く感銘を受けました。

そのほかにもCOVID-19による薬剤耐性菌、マラリア、結核への影響について講演がありました。また、東南アジア地域における顧みられない熱帯病 (NTDs) についての講演もありました。NTDsには Dengue 熱、狂犬病、トラコーマなどがあります。また、抗酸菌が

原因であるハンセン病やブルーリ潰瘍も含まれます。NTDsの感染者は世界に約10億人にもなり、深刻な社会問題になっています。NTDsは貧困による劣悪な衛生環境などが主な原因となってまん延しますが、そのことがまた労働力や生産性の低下を招き、貧困から脱出できない原因にもなっています。また、NTDsに罹患すると、重度の身体障害が残ったり死亡する場合があります。経済活動や社会生活を送るうえで大きな障害となりえます。開発途上国や新興国では、NTDsのまん延が経済成長の妨げともなり、重大な課題の一つでもあります。住血吸虫症、リーシュマニア症、寄生蠕虫症、マラリアの疫学、基礎研究についての発表がありました。

2日目は吉田志緒美博士 (近畿中央呼吸器センター) によるフィリピンにおけるベダキリンとデラマニドの導入による両薬剤に対する耐性結核菌の出現について講演がありました。(都合ですべての講演を聞くことができなかったのが非常に残念でした。)

抗酸菌部門会議

3, 4日目は抗酸菌部門会議に参加しました。4日目は免疫部門との合同会議であり、様々な最新研究の発表を聞くことができました。日本の結核・抗酸菌研究をリードする研究者だけでなく、若手研究者を中心とした集まりである抗酸菌研究会から推薦された若手研究者も研究発表しました。抗酸菌研究会については、本誌401号にて抗酸菌研究会前会長である大原直也先生 (岡山大学) が研究会とその理念について紹介されています。抗酸菌研究会が発足してから日米医学協力計画抗酸菌症部会長である鈴木定彦先生 (北海道大学) には、EID会議および抗酸菌部門会議で若手研究者が発表できる機会を設けていただき、抗酸菌研究会の理念の1つである「国際的に活躍する次世代研究者の育成」に大変貢献していただいています。

非常に興味を引いた講演について紹介します。ワシントン大学のStallings博士は好中球のNETosisが結

核菌感染における炎症に関与することを発表されました。これまでの研究で、細胞内寄生性細菌の殺菌、分解に関わるとされているオートファジー関連遺伝子の中で、Atg5のみがマクロファージや好中球で特異的に欠損するコンディショナルノックアウト（cKO）マウスで結核菌感染に感受性を示すことが明らかにされています。このことはAtg5によるオートファジー以外の分子機構が結核菌感受性に関与することを示しています。結核菌感染Atg5-cKOマウスにおいて好中球を取り除いた場合、結核菌に対して耐性を示すことから、Atg5が関与する好中球で起きる現象に結核菌感受性に関連することを示しました。Stallings博士らはNETosisに注目しました。NETosisとは、好中球が細胞死する際に、apoptosisではなく、Neutrophil extracellular trap（NET）と呼ばれる、細胞外にネット状にDNAを放出する細胞死のことです。Stallings博士らは、結核菌感染によって過剰に起こるNETosisをAtg5が抑制することによって炎症状態を制御していることを明らかにしました。ヒト結核においても、好中球は肉芽腫内で形成される乾酪壊死に集積して細胞死を起こしていることを著者らの研究グループも報告しています。ヒト結核の病原性に、好中球によるNETosisや細胞死制御が関連していることが考えられ、非常に示唆に富む講演でした。

東京大学の反町典子博士は肺線維症におけるアミノ酸輸送タンパク質に注目した研究を講演されました。アミノ酸輸送タンパク質であるSLC15A3をノックアウトしたマウスでは薬剤などによって誘導した肺線維症の症状が軽くなることを明らかにしました。このことはこのアミノ酸輸送タンパク質が肺線維症の創薬標的となりえることを示しています。また、日周断食もマウスの肺線維症の悪化を抑制することを示しています。この断食による効果をマクロファージの遺伝子発現に関連付けて説明しました。さらに、ほかのアミノ酸輸送タンパク質であるSLC15A4とマクロファージの代謝と炎症制御についての研究発表をされました。マクロファージの代謝制御を行うことで、感染症を含む慢性疾患における炎症状態を管理できることを示さ

れ、非常に興味深かったです。

ジョンズ・ホプキンス大学のBishai博士は、特殊なマウスモデルを用いて男性の結核感受性について明らかにする研究を発表されました。これまでに、男性の結核り患率（男性60-70%）や死亡率が高いことは知られています。疫学的に、男性は女性に比べて医療サービスへのアクセスが悪いことが示されています。また、1929年に起こったLübeck disasterでは男児の結核発症率および死亡率が女児よりも高かったことも示されています。性ホルモンと免疫との関係、X染色体における様々な免疫に関与する遺伝子などが存在していることも男性の結核感受性に関連しているといわれています。しかし、実験的に男性の結核感受性を示すことは非常に困難でした。Bishai博士らはFGCマウスモデルを用いて男性の何が結核に感受性を示すのかを明らかにしました。FGCマウスでは、Y染色体に存在する精巢の形成を決定する精巢決定遺伝子座（Sry）が欠損していて、その遺伝子座は常染色体にコードされています。このマウスでは、性遺伝子はXYであっても、常染色体にSryがないと卵巣を形成して、生殖器的にメスになります。反対にXXマウスでも常染色体にSryが存在すると、精巢が形成されて生殖器的にオスになります。このマウスモデルに結核菌を感染させると、XXマウスでも精巢を形成するマウスは結核菌に感受性があり、反対にXYマウスでも精巢を形成しないマウスは結核菌に耐性があることを示しました。何が結核感受性を決定しているかを端的に示した研究であり、今後このマウスモデルを利用した研究進展が期待できます。

最後に

2020年3月に梅村正幸博士（琉球大学）が日米医学協力計画抗酸菌部門会を沖縄で開催することになっていましたが、COVID-19パンデミックのために中止になりました。現在、次回の部門会を沖縄で開くことが計画されています。今後、持続的にEID会議が開催されて、アジアにおける結核を含む感染症対策がより強力に推進されることが期待できる会議でした。🍵

ザンビア事務所活動報告（後編）

結核予防会国際部

計画課長 後藤 真喜子

結核予防会ザンビア事務所

現地代表 松岡 裕子、プロジェクトコーディネーター 天野 さとみ

現在の活動

2023年3月29日より、外務省NGO無償資金協力及び複十字シール募金より支援を受けた新プロジェクト「ルサカ郡における結核診断技術の向上を通じた結核対策プロジェクト」を開始しました。また、過去のプロジェクトの検証・評価事業も実施し、これまでの活動成果が継続していることが確認できました。

(1) 「チョングウェ郡の結核対策プロジェクト評価事業」

外務省NGO補助金の助成を受け、過去（2015年～2018年）に実施したプロジェクトの評価を行いました。初めての試みですが、これまでに実施したプロジェクトがどのように継続されているか、その効果がどのように波及しているのかを検証しました。保健ボランティアや関係者68名に聞き取り調査を行い、私

たちのプロジェクトで育成したボランティア48名のうち、21名がプロジェクト終了後も継続して活動していること、新たに6名が育成されたことが確認できました。他方で経済的な問題から離職するボランティアも多く、モチベーション維持が課題となっています。

(2) 新プロジェクト「ルサカ郡における結核診断技術の向上を通じた結核対策プロジェクト」

2023年3月29日から外務省NGO無償資金協力及び複十字シール募金より支援を受けた新プロジェクトを開始しました。3月9日に在ザンビア日本国大使館にて署名式を行いました。今回のプロジェクトでは、古くなり使われなくなったX線室を改修し、新しい日本製のX線機材を入れ、専門家やAIによる画像診断をメインにさらにザンビアの結核対策を推進していく所存です。🐼



新プロジェクトの署名式（在ザンビア日本国大使館にて）

写真左）左から竹内大使、天野（筆者）

写真右）左から2番目がルサカ市長、その右隣から順番に難民を助ける会（AAR）秋本氏、竹内大使、天野、ザンビア内務省職員、同国保健省医官

ザンビア共和国の紹介



外務省 HP より

時差

時差は7時間。日本の午後3時にザンビア事務所の始業です。日本のスタッフとザンビアのスタッフが意思疎通をよく図り物事を進める必要がありますから、効率よく早めに連絡を取り合うこと、情報共有を徹底すること、スカイプやZoomなどですぐに連絡を取れる状況にしておくことなど、工夫しています。プロジェクトのオンライン研修でも時差は大きな課題で、新プロジェクトでは対面研修が実施できることを祈っています。

距離

とても遠いので乗り換えを入れて約24時間かかります。新型コロナウイルス感染症流行時には外務省より一時帰国が強く推奨されたため、駐在員は帰国を検討しましたが、運航しているフライトが日々少なくなり不安でした。ザンビア駐在者は他のNGOスタッフなどと一緒に子連れで長距離を移動して何とか帰国しました。

現地事務所の紹介



ザンビア事務所の入り口



写真中) 前列左からポール、トレッサ、アイザック、ムレンガ 後列左から松岡（筆者）、ダカ、デイビット、天野、ジョセフ
写真右) ムレンガの送別会（花束を持っているのがムレンガ）

2名の駐在員と7名の職員が上記の活動を支えています。

ダカ：結核コーディネーター。冷静で物腰も柔らかいですが、言うときはビシッとと言える人。

デイビット：フィールドコーディネーター。コミュニティ活動から政策作りまでも関わる実力者。（でも日本人の前ではツンツンしている。）

ポール：事務/会計、イベントの司会進行がとっても上手。

アイザック：フィールドアシスタント。いつもニコニコ笑顔で迎えてくれます。

ムレンガ：ドライバー。長年事務所に勤務していただき今年定年に。みんなで退職をお祝いしました。

ジョセフ：ドライバー。家族思い、奥さんには頭が上がらない様子。

トレッサ：事務所アシスタント。彼女のつくるザンビアの主食、シマは絶品。最近では栄養学を学んでいます。

鎌倉と結核ー鎌倉海浜院と長與專齋

結核予防会顧問

結核予防会アーカイブ委員 石川 信克

鎌倉の駅から江ノ電で5分、長谷駅で降りて5分北に歩けば、大仏の鎮座する高德院に着く。入れば、見事な大仏さまの穏やかな座像が現れる（写真1）。

鎌倉といえば、大仏（国宝）と鶴岡八幡宮が有名である。鎌倉幕府にまつわる史跡、風光明媚で富裕層の別荘地ではあったが、現在のように、観光の街として栄えてきたのは、明治以降らしい。しかし結核との関係は余り知られていない。結核治療の近代的薬物療法が無かった時代、西欧諸国でも、自然環境が良いサナトリウム（療養所）での大気・安静・栄養療法が行なわれていた。

明治初期に東京医学校（東京大学医学部の前身）に招聘され、教鞭をとっていたドイツ人医師エルウィン・ベルツ博士は、当時の先進的治療法としてサナトリウムを日本でも作るように推奨し、湘南地方がそれに向いていることを示唆したという。その影響で、湘南の海岸地域には、いくつもの療養所が建設されていった（本誌337号）。明治20年（1887）、日本初のサナトリウム「鎌倉海浜院」が、鎌倉の由比ガ浜の松林の中に開設されたが、その推進人物の一人が長與專齋（以下長与專齋・写真2）であった。

長与專齋（1838～1902年）について

長与專齋は、幕末から明治にかけて、日本の衛生行政の基礎を作った貢献者である。天保9年（1838）、大村藩（現在の長崎県大村市）の漢方医の子として生まれ、藩校で学んだ後、大坂にて緒方洪庵の適塾にて蘭学を学び、やがて大村藩の侍医となった逸材であった。文久元年（1861）、長崎でオランダ人医師ボンベより西洋医学を学び、明治元年（1868年）、長崎精得館の医師頭取（病院長）に就任、同年、同館は長崎府医学校（現長崎大学医学部）となり、学頭に任命された。明治4年（1871）に岩倉具視使節団の一員として欧米に渡り、ヨーロッパで医療制度や医学の実情調査を行った。明治6年（1873）帰国後に医者免許制度や医学教育などの「医制」の制定作業を行い、明治7年（1874）、文部省医務局長に就任、東京医学校の校長を兼務した。明治8年（1875年）、内務省衛生局初代局長に就任する。コレラなど伝染病の流行に対して上下水道など衛生工事を推進、衛生思想の普及に尽力した。「衛生」という言葉は、長与がHygieneの訳語として用いた。



写真1. 鎌倉大仏



写真2. 長与專齋

長與先生顕彰の碑

大仏に向かって左側の木立の中に「松香長與先生紀功之碑」という石碑がある（写真3）。大正8年（1919）、町制25周年の記念事業の一つとして、日本衛生行政や鎌倉の発展に貢献した長与専斎（号は松香）の功績を長く伝えるために建てられた。文章は漢文のため、鎌倉国宝館の浪川幹夫氏の助力（和文体）をもとに、解釈も交えて要旨を書いてみたい。

「鎌倉は三方山に囲まれ、南は青海原に接し、黒潮が近くに流れ、風も吹き、冬は温暖、夏は涼しく、養

生に適している。天下取りや高僧の遺跡が身近にある。山、樹木、石の一つ一つが800年前の歴史を物語っている。近年は、多くの高官や富豪が邸宅や別荘を構え、外国からの観光者も訪問、街は繁栄してきた。その基を作ったのは、実に松香長与先生である。先生は、旧肥前大村藩の医師で、明治維新後、文部・内務両省に長く歴任し、衛生局長を勤められた。医療制度の改革、衛生法規の制定等、先生の偉業は甚だ多い。貴族院議員、宮中顧問官も務められた。晩年は病者の療養のために、鎌倉の地を選び、由比ガ浜において初めて、西欧に倣った養生院の海浜院を建てた。これで世間はますます海辺の気候の有用性を知ることになった。こうして人々を助け、鎌倉の地で遂行された業績により、今日の栄えた町の住民は、町政施行満25年を記念し、長谷の大仏の傍らに碑を建立することになった。私は、先生の教えの恩義を覚え、その功績をたたえて、後世に伝えるべく碑に文章を書き記す。風光の明媚や史籍の豊かさはあっても、衛生施設は不十分であった地に、先生は、道路や上下水道を整備された。お陰で、町は天下の名勝としての価値を高めた。（後略）」題字は松方正義侯爵、文章は土肥慶蔵東京帝国大学教授による。



写真3. 松香長與先生紀功之碑
碑の左は筆者



写真4. 由比ガ浜

鎌倉海浜院・海浜ホテルの碑

高德院を出て、緩やかな坂道を15分ほど南に下ってゆくと、見事な海岸線が広がって見え、由比ガ浜に着く(写真4)。一帯は、海浜公園の一部で、広い海水浴場で、サーフィンを楽しむ若者でにぎわう。海岸にそってしばらく東に歩くと、空き地の一角に、江ノ電の古い車両タンコロが置いてあり、その脇に黒い石碑が見える。「ここに鎌倉海浜院、鎌倉海浜ホテルありき」と刻まれている(写真5・6)。海水浴、保養に適しているとされたここ由比ガ浜の松林の中に日本初のサナトリウム鎌倉海浜院が開院された。その後、鎌倉海浜ホテルとして生まれ変わり、内外から数多くの著名人が集い、保養地鎌倉の重要な場所となった。結核菌発見者のロベルト・コッホ博士も明治41年(1908)に訪日した際、このホテルに滞在したという。昭和21年失火により焼失した。

鎌倉にあった結核療養所

湘南地域にあったサナトリウムについては、前述の

本誌337号に述べられているが、12か所のうち、6か所は鎌倉にあり、その多くは現在も病院や医療施設として地域に貢献している。

鎌倉は、結核という病気と共に発展してきたとも言える。

付言：今回の鎌倉訪問と本稿のきっかけには、一枚の水彩画がある。知人の画商から、絵の裏に英語で書かれた商品があり、その内容を尋ねられた。松林の描かれたその絵は、ある外国の画家が、友人に贈ったらしく、絵の裏には、Kaihinin Hotel, Kamakura, 1911とあった。調べてみて、海浜院ホテルの名前を初めて知り、その前身が結核療養所の鎌倉海浜院であることも知った。海浜院の松林が、明治の昔と100年を越えた今とを結びつけることになった。🍵

i 湘南地方サナトリウム旧跡訪問(島尾忠男他、複十字337号2011)
<https://www.jatahq.org/pdf/headquarters/document/tb-archive/337.pdf>
 *日本のサナトリウムの歴史については、高三啓輔著「結核の百年 サナトリウム残影」日本評論社に詳しい。



写真5. 江ノ電タンコロと海浜院・海浜ホテルの碑



写真6. 海浜院・海浜ホテルの碑(拡大)

支部長だより

結核予防会支部長に就任された方にご挨拶をご寄稿いただき、本コーナーに掲載いたします。



支部長就任のご挨拶

公益財団法人東京都結核予防会

理事長 笹井 敬子

令和4年10月に公益財団法人東京都結核予防会理事長に就任いたしました。よろしくお願いいたします。

当会は、財団法人結核予防会の東京都支部を母体に昭和36年に財団法人東京都結核予防会として発足し、平成25年に公益財団法人へ移行して今日に至っています。設立以来、東京都の結核予防活動に呼応した事業を展開するとともに、地域保健、職域保健、学校保健の各分野で事業内容を拡充し、広く都民の健康増進に寄与してまいりました。

当会の主な事業は、健康診断、健康相談、広報普及活動で、東京都の結核特別対策促進事業を受託するほか、学校や施設の総合健診事業なども実施しています。特に、デジタル画像診断装置を装備したCR車を活用した健診では、撮影後すぐに診断できるよう読影モニ

ターを装備し医師が同乗する体制をとり、また、車椅子の方でも撮影が可能なりフト付きのレントゲン車を配備して高齢者施設や福祉施設などの健診にも力を入れてきました。さらに、COVID-19のパンデミックを経て感染症への関心が高まる今を結核はじめ感染症予防の普及啓発の好機ととらえて活動を行っています。

東京都の結核の状況については、令和3年の罹患率（人口10万対）が10.2と全国平均（9.2）に比較して高く、また、新登録患者数は1,429人で、そのうち外国出生患者が13.4%を占めています。

当会は、こうした状況を改善し、東京都においても結核の低蔓延化が実現するよう、東京都、結核予防会本部、東京都地域婦人団体連盟の皆様方と力を合わせて取り組むとともに、公益財団法人としての社会的責任を自覚しながら都民の健康の保持増進に貢献してまいります。

今後とも、関係者の皆様のご指導、ご支援を心からお願い申し上げます。🍀



支部長就任のご挨拶

公益財団法人山口県予防保健協会

理事長 加藤 智栄

令和4年8月より公益財団法人山口県予防保健協会理事長に就任するとともに、結核予防会山口県支部長に就任いたしました。よろしくお願いいたします。

当協会は、1974年5月に「財団法人山口県予防衛生協会」として発足し、1975年4月には、名称を「財団法人山口県予防衛生医学協会」に改称し、1986年3月には「財団法人山口県予防衛生医学協会」と「財団法人結核予防会山口県支部」が統合し、「財団法人山口県予防保健協会」を設立しました。その後、2013年4月に現在の「公益財団法人山口県予防保健協会」となりました。

当協会では、新生児から高齢者の皆様まで、誰もがそのライフステージに応じて健康で安心して暮らせる社会づくりに寄与することを目指して事業を進めています。具体的には、がんをはじめとする各種の健康診

断・検診、生活習慣に関する保健指導、生活環境の調査・分析、食品や飲料水の検査などを行っています。さらに、結核予防の普及啓発活動（複十字シールによる募金活動等）を行っています。

山口県は、全国的に見てもがん検診や特定健診などの受診率が低い状況となっています。こうした中、複十字シール運動は結核患者発見のための結核健診受診勧奨の役割を担っており、健診の受診率の向上に向けた取り組みは、結核撲滅のために重要な使命だと考えています。

結核は、まだまだ主要な感染症の一つであり、2025年までに罹患率を人口10万対7とする目標を達成すべく、各地域の婦人会とも協力し、この目標に向かって関係団体が力を合わせ、結核撲滅のために努力することが大切であると考えていますので、当協会としても、結核の予防や撲滅対策にしっかり取り組んでまいります。

今後とも、本部、各支部をはじめ、関係機関の皆様方には引き続きご支援、ご指導を賜りますようお願い申し上げます。🍀

同じ目標を目指す全国の仲間との濃密な三日間 「令和4年度診療放射線技師研修会」に参加して

公益財団法人愛媛県総合保健協会南予支所

担当係長 宮本 修治

WBCで侍ジャパンが優勝した記念すべき3月22日から24日までの3日間、診療放射線技師研修会がオンライン形式で開催され、愛媛県宇和島の温暖な地から参加しました。当協会は松山市に本部を置き、新居浜市に東予支所、宇和島市に南予支所があります。現在、「行ってこーわい！愛媛の健診」を合言葉に、コロナ禍での健診受診控えを解消するプロジェクトを始動したところです。

1日目

初日は、最も期待していたグループディスカッションから始まりました。59名が7班に分かれて最新の情報を共有します。筆者のグループではチューターのおかげで緊張も和らぎ、時間が足りなくなるほど積極的な討議となりました。同じ健診業務をしていても施設ごとに違う切り口のアプローチがあり、新型コロナウイルス感染症対策として、着替えが必要な方の健診着を使い捨てにして有料化する、車椅子対応の胸部検診車の普及率の高さなど、参考になる事例が盛りだくさんでした。



2日目

ここからは講義に入ります。「読影モニタの品質管理」では、経年劣化は単体では判断が難しいこと、読影室の窓や照明の方向、昼・夜の別も影響することを学びました。当協会では約30台のモニタを運用していますが、定期的な品質管理が十分にできていなかったことを痛感しました。使用時間によってモニタを配置換えすることは、すぐにでも活用できる情報でした。

「良好な胸部エックス線画像とは」では、デジタル化で困難だった部位の病変発見が、これまで以上に可能になったこと、いろいろな指標を設けて数値化する必要性を学びました。結核予防会で開催される12月の精度管理研究会に向けて、さらに画質向上を図っていきたいと思います。

3日目

「より良い乳房X線画像の撮影技術」では、女性のがん1位は乳がんであるが死亡率は5位であり、“正しい検診を正しく行うことで死亡率減少につながる”との言葉に、技師の役割の重要性を再認識しました。当



写真上) PCに向かって本研修を受講中の筆者
写真左) 集合写真（左から4番目・上から2番目が筆者）

協会の技師23名で共有したいと感じた、とても胸に響く言葉でした。

「がんとの向き合い方」では、日本対がん協会垣添会長から、がん対策は予防・検診・治療・緩和ケアに分かれることをご自分の経験をもとにお話しされ、質問にも丁寧にお答えいただきました。緩和ケアでは在宅医療の拡充を図っていく必要性を強く感じました。

「消化器がんについて知る」では、がんのリスクを減らす1次予防、2次予防、ゲノム治療、免疫療法について学びました。早期発見・早期治療の重要性は理

解しているものの、胃がん検診を担当している技師として、最先端の治療法についての知識を得ることができました。

オンライン研修とはいえ、全国の59名の仲間との情報共有や講師との質疑を通じて、とても濃密で充実した3日間を経験することができました。最後になりましたが、講師の先生、協議会役員、両会スタッフの皆様には、貴重な経験をさせていただき感謝しています。今後の健診業務に活かしていきたいと思います。



結核研究所が開催する国内研修・講習会のご案内

令和5年度国内研修日程

	研修名	日 程
医学科	医師・対策コース	① 6月20日(火) ～ 23日(金)
		(WEB) ② 11月14日(火) ～ 17日(金)
	医師・臨床コース	10月26日(木) ～ 28日(土)
保健看護学科	保健師・看護師等基礎実践コース	① 5月23日(火) ～ 26日(金)
		(WEB) ② 6月13日(火) ～ 16日(金)
		③ 6月27日(火) ～ 30日(金)
		④ 10月17日(火) ～ 20日(金)
		(WEB) ⑤ 12月12日(火) ～ 15日(金)
	保健師・対策推進コース	9月12日(火) ～ 15日(金)
	最新情報集中コース	11月9日(木) ～ 10日(金)
	結核院内感染対策担当者コース	(WEB) 11月25日(土)
	結核行政担当者コース	10月3日(火) ～ 6日(金)
	対策中級コース	1月22日(月) ～ 26日(金)

*状況により、日程・定員・様式を変更する可能性があります。

令和5年度結核予防技術者地区別講習会（日程順）

石川県	7月6日(木)・7日(金)	北海道	8月24日(木)・25日(金)
福島県	7月13日(木)・14日(金)	栃木県	8月31日(木)・9月1日(金)
熊本県	7月20日(木)・21日(金)	和歌山県	9月7日(木)・8日(金)
鳥取県	7月27日(木)・28日(金)		

*開催についての詳細は、各開催道県にお問合せください。

令和5年（第38回）結核研究奨励賞受賞おめでとうございます！

「公益財団法人結核予防会結核研究奨励賞」は診療放射線技師，診療X線技師，臨床検査技師，衛生検査技師及び保健師，看護師その他医療技術者の結核に関する研究を奨励することを目的に設立され，本年は3名の方が受賞されました。誠にありがとうございます。🐼

（普及広報課）

◆^{おおにし ゆ か}大西由果様（独立行政法人国立病院機構
北海道医療センター）

業績：一般病院・施設職員が結核患者へ対応する際に
感じる不安への関わり
—パンフレットを用いた情報提供を通じて—

◆^{ふくざわしょうた}福澤翔太様（独立行政法人国立病院機構
北海道がんセンター）

業績：Selective Detection of DNA from
Mycobacterium tuberculosis Complex Strains
Using the EMA-PCR Method. (Jpn J Infect
Dis.2019 Jan 23;72(1):19-22.doi:10.7883/yoken.
JJID.2018.111. Epub 2018 Sep28.)

◆^{かみやなぎ か よ み}上柳加代美様（一般財団法人大阪府結核予防会
大阪複十字病院）

業績：外来業務の負担軽減への取り組み
採痰指導動画がもたらす効果の検証

第27回結核予防関係婦人団体中央講習会 (3年ぶりの対面による開催)

2月28日（火）～3月1日（水）の2日間に，北は北海道から南は沖縄県までの70名がKKRホテル東京（千代田区）に集まりました。

結核予防会総裁秋篠宮皇嗣妃殿下のご臨席を仰ぎ，開講式ではお言葉を賜りました。

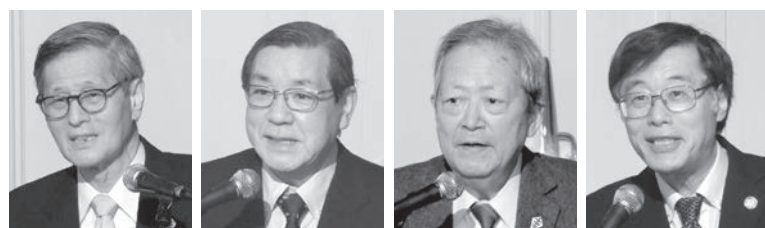
講演では，結核予防会理事長の尾身茂先生から，「コロナ対策とこれから」と題して，感染症法の5類移行やマスク着脱などのタイムリーな話題をお聞きしました。続いて，東都大学沼津ヒューマンケア学部教授の松田正己先生から「SDGsと結核予防婦人会活動について」と題して，SDGsの歴史から，結核とのかかわりなど，SDGsと婦人会の結びつきを知る良い機会となりました。また，結核研究所名誉所長の森亨先生からは新型コロナウイルス感染症も結核も一緒に対策す

ることができるという話をいただき，今後の活動の励みとなりました。

2日目は，結核予防会国際部付部長の小野崎郁史先生から，コロナ後の結核予防活動について，きめ細やかな国際協力に複十字シール募金が不可欠というメッセージをいただきました。

最後に，14グループに分かれて班別討議を行いました。今まで行ってきた婦人会活動が，SDGsに深く関係し，すでに活動をしてきたことを認識しました。「自己・人・物を大切に」「満点から始める」をキーワードに，自分でできるSDGsのヒントを参加者と分かち合いました。🐼

（全国結核予防婦人団体連絡協議会事務局）



左から尾身先生，松田先生，森先生，小野崎先生



白熱した班別討議

第98回日本結核・非結核性抗酸菌症学会

会 長：公益財団法人結核予防会結核研究所 所長 加藤 誠也

市民公開講座

「日本の結核予防の礎を創った人々」

開催日時：2023年 6月11日（日）15時40分～17時40分

開催場所：京王プラザホテル「エミネンスホール」（南館5階）

〒160-8330 東京都新宿区西新宿2-2-1

※ライブ配信も有ります

座長：工藤 翔二（公益財団法人結核予防会 代表理事）



- ① R. コッホに学び結核予防協会、日本結核病学会を創設された
北里 柴三郎 先生

小林 弘祐 氏（学校法人北里研究所 理事長）



- ② 結核予防協会を創設し、結核予防会の発足に尽力された
第一生命創業者 矢野 恒太 氏

渡邊 光一郎 氏（第一生命保険株式会社 特別顧問）



- ③ 日本で初めてBCGワクチン接種を行い、全国に先駆け検診車を
導入された 今村 荒男 先生と「今村賞」

増田 國次 氏（大阪府結核予防会 顧問）



- ④ エックス線検査による結核診断の道を開かれた結核病理学の
泰斗 岡 治道 先生

森 亨 氏（結核研究所 名誉所長）



- ⑤ 結核予防会創設以来55年にわたって総裁を務められた
秩父宮妃勢津子殿下

山口 峯生 氏（元秩父宮付宮務官）



参加費

無料

申込方法

右のQRコードまたは下記URLにアクセスのうえ、お申し込みください。
<https://www.kekkaku.gr.jp/jst98/>

お申し込みが完了されましたら、当日のご案内
（来場・ライブ配信視聴方法）をメールにてご案内いたします。

申込期間

2023年 5月10日（水）12時～6月11日（日）17時

お問合せ

運営事務局（株式会社コンベンションプラス）

E-mail：98jst@convention-plus.com

TEL：03-4355-1137（平日10時～18時、土日祝を除く）



2023年「世界結核デー」に 関係機関が寄せたメッセージ

ストップ結核パートナーシップ日本
事務局次長 宮本 彩子

世界保健機関（WHO）やストップ結核パートナーシップ（ジュネーブ）の今年の「世界結核デー」（3月24日）のテーマは、「YES! We Can End TB」（イエス！私たちは結核を終息できる（仮訳））であった。このテーマの背景と、結核に関連する主要な国際機関が世界結核デーに寄せたメッセージを紹介する。今年は、第2回国連総会結核ハイレベル会合（UNHLM-TB）が、ユニバーサル・ヘルス・カバレッジ（UHC）、「パンデミックを含む公衆衛生危機に対する予防・備え・対策（PPR）」の会合と同時開催され、またインドを当番国するG20首脳会議の保健課題では結核を焦点の1つとしている。国際社会、市民社会の注目と支持を集め、新型コロナウイルス感染症パンデミックによる2030年結核終息（SDGs3.3）への歩みの遅延をとり戻し、その実現に向けたモメンタムを形成する重要な年である。今年のテーマは、市民社会の関与を強化し、世界の結核に対する意識を向上し、特にUNHLM-TBにおいては、各国首脳による強力な政治宣言の承認と最大限の参加を確保することに重点を置いている。下記に示す国際機関は、それぞれの立場での関与を表明し、UNHLM-TBへの支持を呼びかけている。

世界保健機関（WHO）

世界結核デーにおいて、結核終息に向けた取り組みを加速するために5つの行動を呼びかける。

①UNHLM-TB等での各国の政治的に高いレベルでの指導力の発揮。②結核対策の新技术の導入・拡大のための国内・国際的な資金の増強。対象は、予防投薬の新方式の普及、超短期治療レジメン、迅速分子診断など。③最新のWHOガイダンスの迅速な実施、特に新しい対策技術普及や薬剤耐性結核に対する新規短期全経口治療レジメン展開の加速。④健康に関する不平等を解消することの重要性。⑤貧困、栄養不足、劣悪な生活・労働環境などの結核の原因となる要因に対し「保健」を超えた全てのセクターが協調して対処することの重要性。世界最大の感染症である結核を終息するために、もう言い訳や遅延は許されない。（要約）

<https://www.who.int/news/item/24-03-2023-who-world-tb-day-message-dr-tereza-kasaeva-director--who-global-tb-programme>

国際結核肺疾患予防連合（The Union）

小児結核に焦点を当てる。家庭や地域社会の未診断・未治療の大人から最近感染した可能性が最も高いからである。我々は最近小児・青年の結核治療支援のための組織をいくつか創設した。さらに小児・青年結核に関するアフリカのいくつかの国を結ぶネットワークを組織した。このような努力を通して間近に迫ったUNHLM-TBで、総力を結集し有意義なコミットメントを取り付ける必要がある。（要約）

<https://theunion.org/news/we-must-find-and-treat-everyone-with-tuberculosis-tb-to-end-tb>

世界エイズ・結核・マラリア対策基金（Global Fund）

結核は、世界で最も死者数の多い感染症の1つ。結核は予防や治療が可能であり、終息の為のツールや知識があるにも関わらず、気候変動や戦争、不公平な社会的状況などによって、依然として多くの人々が苦しんでいることを認識しなければならない。国際社会は、今すぐ行動を起こさなければならない。（要約）

<https://express.adobe.com/page/GzCGrCTU4TlgO/>

Unitaid（ユニットエイド）

この10年間で薬剤耐性結核の治療法は大幅に改善された。WHOは薬剤耐性結核に対する9カ月間の経口治療レジメンを推奨（ユニットエイドのプログラムと協働して勧告を策定）しているが、多くの人々はこれ

らの改善にアクセスができないままである。2018年開催のUNHLM-TBの目標であった「2022年までに薬剤耐性結核患者150万人の治療」には程遠い状況である。ユニタイドは、すべての人々がケアを受けられるようにするために2億5千万米ドルを投資し、結核終息に向けて尽力する。(要約)

<https://unitaid.org/news-blog/world-tb-day-unitaid-joins-whos-call-to-action-for-shorter-and-more-effective-regimens-for-all-people-suffering-from-drug-resistant-tb/#en>

ストップ結核パートナーシップ (Stop TB Partnership)

資金需要、新規ワクチンを含む研究開発、新規迅速分子診断やより効率的な新しい治療レジメンへのアクセス、予防、小児結核、コミュニティ、権利、ジェンダーなど、注力すべき分野が多くある。2023年は、結核に関係する全ての人にとっての「希望の年」として、国際社会からの全面的な支持、注目、エネルギーを集め“YES！We Can End TB” (要約)

<https://www.stoptb.org/world-tb-day/world-tb-day-2023>

世界結核デー 主なキャンペーンビジュアル (Stop TB Partnership・ジュネーブ)



ストップ結核パートナーシップ
日本も結核予防会様のご協力を
得て、SNSのキャンペーンに
参加しました。



多額のご寄附をくださった方々

〔指定寄附等〕(敬称略)

奈倉理一、岡田耕輔、滋賀県知事 三日月大造、田口治子

〔複十字シール募金〕(敬称略)

岩手県—(団体)真山池田医院、新岩手農業協同組合、坂の上野田村太志クリニック、滝沢中央病院、木津屋本店、寿広、千葉耳鼻咽喉科医院、快老苑金ヶ崎、日新堂、未来の風せいわ病院、岩手日野自動車、岩手自動車電機、岩手県対がん協会、立正堂医院
(個人)石川洋子

栃木県—(団体)黒磯保健センター、大田原市役所、宇都宮市保健所、栃木県済生会宇都宮病院、とちぎメディカルセンター、自治医科大学、足利赤十字病院、両毛病院、栃木県医師会、小山地区医師会、鹿沼歯科医師会、足利銀行事務サポート部、栄研化学那須事業所、栄研化学北関東・信越営業部、前川メディカルサービス(個人)木平百合子

群馬県—(団体)神垣鉄工所、北関東メディカルサービス、群桐産業、藤田エンジニアリング、星野総合商事、群馬県老人保健施設協会、介護老人保健施設けやき苑、大戸診療所、群馬リハビリテーション病院、登利平、富岡倶楽部、群馬県医師会、慶友整形外科病院、群馬県環境保全協会、栗原レントゲン、伊勢崎福島病院、みくに労務管理事務所、リフォーム群馬、群馬県薬剤師会、群馬県歯科医師会、堀口電機サービス、ケイエムオー、群馬電装、関東いすゞ自動車、田中病院、特別養護老人ホーム吉井の丘、アースケア、ぐんまみらい信用組合、かぶら食品、群馬県警察本部、群馬県、館林市、渋川市、安中市、榛東村、草津町、昭和村、玉村町、千代田町、大泉町

(個人)紺正行

千葉県—(団体)東庄女性の会、横芝光町婦人会、松永小児科、力武医院、九十九里ホーム病院、江東微生物研究所千葉支所、トシロ、国泰会計事務所

東京都—(団体)東京都交友会

福井県—(団体)大野市役所、勝山市役所、若狭町役場、福井県立病院(看護部)、福井県健康管理協会

岐阜県—(団体)可茂建設業協会、長良義肢製作所、石榴、岐阜信号施設、戸田会計、松本電気設備、ヒルムタ興業、岐建、中濃、加藤工務店、田中建設工業、中央設備商会

(個人)中西東峰

愛知県—(団体)リウゲ内科名駅クリニック、羽栗病院、野田内科小児科医院、大橋内科、ささき小児科、藤城クリニック、相互不動産、精器商会、メンアットワーク青木、彦坂外科、瀧田医院、丸高運輸、北里クリニック、ENT、矢田工業所、那須・岩崎法律事務所、那須國宏、ナゴヤ建機センター、新城市医師会、いとう内科小児科、タカラ製作所、北徳、三鈴電気商会、北関東メディカルサービス、志賀医院、さかまきクリニック、田島クリニック、藤井内科胃腸科、伊藤医院、小竹素子、福友会、伊藤整形外科、中野胃腸病院、安藤証券、北設楽郡医師会、安藤クリニック、宇野内科、水野良夫税理士事務所

(個人)立松廣、野崎裕二、鈴木雅雄、新城壽、樋口禮治、伊藤典康、佐久間修三

滋賀県—(団体)豊郷町保健福祉課、山田整形外科病院、山田忠尚、観音正寺、米原市近江老人クラブ連合会、びわこ競走労働組合、小林事務機、湖南市、近江八幡市役所、長寺西学区長、小川光治、まつざき内科クリニック、松崎茂、栗東市健康増進課、葉の花心療クリニック、椋田稔朗、愛荘町職員互助会、油定薬局、草津市役所、滋賀県、彦根市健康推進課

京都府—(団体)浄美社

(個人)尾本道弘、酒井泰彦

大阪府—(団体)山本鋼材、富士フィルムヘルスケア、キヤノンドテックサプライ、浄美社、生心科学会

(個人)甲木宏明、永尾尚子、吉田仁

兵庫県—(団体)加古川市連合婦人会、加東市連合婦人会、加西市連合婦人会、尼崎南警察署、真鍋克己、明石市立市民病院、ツカザキ病院看護部、生駒病院
(個人)長澤進、石濱義民、赤木竜也、岸睦久、溝端弓子

香川県—(団体)池田内科クリニック、香川県医師会、香川県婦人団体連絡協議会、香川県予防医学協会、香川県立中央病院、かがわ産業支援財団、琴平老人の家、四国特機、高松市医師会、高松赤十字病院、特別養護老人ホーム弘恩苑、直島町役場住民福祉課、伏見製菓、三木町役場住民健康課、三豊総合病院企業団、山田医院、屋島総合病院、東かがわ市役所保健課

宮崎県—(団体)竹内病院、小室医院、どんぐりこども診療所、宮崎県理学療法士会、宮崎県保険医協会、市来内科・外科医院、千代田病院、野崎病院、宮崎市郡薬剤師会、ソフトテックス、第一ビル管理、地域婦人連絡協議会、宮崎市保健所健康支援課、延岡市地域婦人連絡協議会、健康づくり協会職員、宮崎県庁福祉保健部健康増進課

本部(令和4年度ご寄附分)—(団体)石油連盟、一般社団法人免疫診断研究所、ゆたか在宅福祉サービス、結核予防婦人会御一同

(個人)矢島眞気子、森新一郎、小林典子、平井時夫、村松禎夫、松田正巳

令和4年秋の叙勲受章

旭日小綬章

大阪府結核予防会

顧問 増田 國次 先生



令和4年秋の叙勲が発表され、大阪府支部(大阪府結核予防会)顧問の増田國次先生が保健衛生功労により「旭日小綬章」を受章されました。心よりお祝い申し上げます。(普及広報課)

第12回本部・総合健診推進センター業績発表会を開催

令和5年4月8日(土)、総合健診推進センター(総健)で業績発表会を3年ぶりの集合型で開催しました。演題数は本部3題・総健5題で、各部署の日頃の取組みへの改善点や成果を発表し、職員間の相互理解を深めました。



「複十字」へのご意見をお聞かせください

記事へのご意見、ご感想等を当会へ郵送いただくかfukyu_hq@jata.or.jpにお送りください。内容の充実に向けて活用させていただきます。

2023年(令和5年)5月15日発行

複十字410号

編集兼発行人 小林典子

発行所 公益財団法人結核予防会

〒101-0061 東京都千代田区神田三崎町1-3-12

電話 03(3292)9211(代)

印刷所 株式会社マルニ

〒753-0037 山口県山口市道祖町7-13

電話 083(925)1111(代)

結核予防会ホームページ

URL <https://www.jatahq.org/>

〔編集後記〕

【ある卵好きの嘆き】卵不足でコンビニやレストランで卵料理の販売休止がつついていますが、どうとう近所のスーパーに影響が。値段が上がっただけでなく、商品棚から10個入りパックを見かけなくなり、6個入りパックを2つ買う日々が続いています…

本誌は皆様からお寄せいただいた複十字シール募金の益金により作られています。

令和5年度複十字シールご紹介

複十字シール運動は、結核や肺がんなど、胸の病気をなくすため100年近く続いている世界共通の募金活動です。複十字シールを通じて集められた益金は、研究、健診、普及活動、国際協力事業などの推進に大きく役立っています。皆様のあたたかいご協力を、心よりお願いいたします。

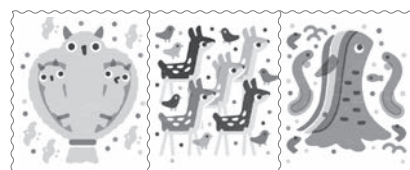
募金方法やお問い合せ:募金推進課

結核予防会 募金

検索

またはフリーダイヤル:0120-416864(平日9:00~17:00)

令和5年度複十字シール



広島県支部に 多目的循環器検診車（宝くじ号）導入

令和4年度の一般財団法人日本宝くじ協会の公益法人助成事業において、結核予防会を通じ、多目的循環器検診車を整備する運びとなり、令和5年2月28日に本部から広島県支部に納車・引き渡しを受けました。

この検診車は、心電図検査・超音波検査・聴力検査・診察等、様々な検査を行うことが可能です。これにより、健診スペースの確保が難しく、健康診断の実施が困難だった中山間地域や島しょ部でも質の高い健康診

断を提供できるようになりました。また小規模事業所や学童にも、健診スペースを考慮せずとも、健康診断の機会を提供できるようになりました。

本検診車の導入により、今後も循環器健診・超音波健診をはじめとした、総合健康診断を通じて、広島県民の健康づくりに寄与して参ります。🍷

（公益財団法人広島県地域保健医療推進機構）



世界の結核事情 ザンビア事務所活動紹介

ザンビア事務所の活動の一部をご紹介します。詳細は本誌P12～13の「世界の結核事情」をご覧ください。🍷



世界結核デー 2022 イベントにて



事業2年次終了後の慰労会ランチ



TS生活向上研修（食品加工）

令和5年度

複十字シール

大型シール(24枚綴り)



あさいとおる氏の
メッセージ

コロナ禍をはじめ、紛争、災害など世界中で困難な状況が続いています。日本では、自分の身や大事な人を「災い」から守るため「お守り」を身につける風習がありました。「お守り」は神様や、そのお使い（神使）などをモチーフに、お札、民芸品、おもちゃとなり、身近に親しまれてきたものです。今の世の「災い」から守るため、祈りを込め「お守り」を描きました。

小型シール(6枚綴り)



令和5年度複十字シールはイラストレーターあさいとおる氏により、鮮やかな黄色を基調として日本各地の動物や神獣をかたどった縁起物が描かれています。疫病の流行を予言した「アマビエ」も新型コロナウイルス感染症の終息を願ってその姿がたくさん描かれ、多くの人々に注目されました。シールの中から3つご紹介します。



すすきみみずく

ふわふわとしたすすきの穂で作られた東京の郷土玩具です。雑司が谷鬼子母神堂の参詣みやげで、安産・子育て・健康守りとされてきたそうです。



五色鹿

奈良の鹿は神の使いとされています。5色の色彩と白い斑点を施した土製の鹿は竹の足をつけて、その造形がとても可愛らしい郷土玩具です。



アマビエ

江戸時代、熊本の海上に現れ、「疫病が流行するので、自分の姿を絵に写して人々に見せるように」と予言して再び海中へ消えていった妖怪と伝えられています。